

政治学概論 II 2024 w10 (2月5日4限) リーディングアサインメント:

加藤淳子「書評『比較政治制度論』(建林正彦・曾我謙悟・待鳥聡史著)」

氏名	Q1	Q2
赤星	p.2の「研究」の意義や「実務」の面白さについて述べられている部分	理由は、今までは大学などで「研究」することは面白く、且つ意義のあるものだろうなどは漠然と思ったことはあれど、それがどこから来ている考えなのかはわからなかったが、その部分がここに書かれていることそのものであることを知り、「研究」や「実務」に対して、ちゃんとした意義や面白さを見出すことができたようになったと感じたから。
岩田	「因果メカニズムが解明できたとしても、制度の組み合わせや実際の運用により結果は変わってくるからである。」(p.3)	選挙制度や政党制度について考える際に、どうしても結果に焦点を当てがちであるが、場合によって変化するというところが面白いと思ったから。政治は同じ方法であっても毎回結果が異なるというところから、政治には正解がないため、不確実で難しいと考える。また、新制度論について、制度が人々にどのような制約や促進などの影響を与えるのかという視点に着目するというのが面白いと考える。
宇名手	「二大政党制」神話を覆す点(P. 1～2)	これまで多くの人が「二大政党制」が安定した政治運営の象徴であるとしなしていた中で、レイプハルトが従来「政治不安定」とされてきた多党制や連合政権が、実際には少数意見を尊重し、合意形成において有益な側面があると指摘し、多党制の価値にスポットを当てたことで今後、政治制度に対する視点を変えることがあるのではないかと思ったから。
遠藤	「比較政治研究を実際に複数国間で行う場合には、比較制度やその因果メカニズムを単純・直接応用することはできない」という箇所が重要だと思った。	これまで各国の政治を単純に比べたり制度を当てはめたりといったことをしがちであったが、そもそもその制度によってどのような結果が導かれるのかは組み合わせや運用次第で変わるものであり、簡単に捉えることはできないと感じたから。しかし、比較政治研究によって一定の条件下での制度の効果を示唆したり、制度を改革する条件や要因を提供しているという意義もあると分かったから。
大石	P3 選挙制度だけでなく、政治体制などが影響してくる点	教科書では政治体制を大まかに比較し、国ごとの特色を理解する場面が多いが、実際に国ごとを比べると二大政党制なのか多党制なのかや官僚組織の影響など様々な要因があり、同じ体制の中でも同じ結果にはならないということを知っておくことが重要だと思ったから。また、安易に政治体制を表面だけ見て判断しないことに繋がると思うから。
大久保	比較政治学とは何か (p.2)	選挙制度・政党制度のようなそれぞれの制度がどのような結果を導き出すかに関して、因果メカニズムが解明できたとしても、制度の組み合わせや実際の運用により結果は変わってくるとあったが、世界で同じような名前で語られていることであっても、政治に関わる人の性格であったり、その国の事情によって変化していくので、比較というふうに挙げられていても本当の意味での比較ではないのだなというふうに思った。

(continued)

氏名	Q1	Q2
片山	明示的解決策を与えない研究は役に立たない、という批判は割り引いて 3 ページ目	混合並立性を取っている国のそれぞれの背景が違う以上、メカニズムを解明してもどのような結果をもたらすかは変わってくるので、研究の意味とは思った。また、その他の分野の研究でも、実務家達へ明示的な解決策を与えられずに、理論があるだけで意味がないと思われるのもあると思う。しかし、研究は時に、問題解決や改革に有効な糸口や示唆を与えてくれる場合もあるので、個人的には筆者の言っていることが重要だと思ったし、同意した
加藤	2、3 ページの比較政治学とは何かの箇所	比較政治学というものを理解することに加え、その重要性について気づくことができたからである。比較政治学は、政治システムや制度、政府の運営などを国や地域ごとに比較することで、政治の動きや構造について理解を得られる点で重要だと感じた。世界中の国々が特有の課題や共通の課題を抱えている中で、他国での成功事例や失敗事例を通して、グローバルな視点から効果的な解決方法が見つかる可能性があるところが学問として重要な分野であり、意義をもっていると考えた。
喜多川	多党制・連合政権の下での少数意見の尊重や合意形成の意義を再認識させたこと	政治的不安定性と決定の難しさの代名詞のように考えられていた多党制・連合政権という言葉があったが、その通りだと思った。その中で、少数意見の尊重や合意形成の意義を再認識させたことが、なぜ民主主義の意味まで問うことになったのか気になった。
黒田	中選挙区制から混合並立制へ移行した日本 p3	私は、そもそも混合並立制とは何か知らず、意味を調べてみた。調べてみると、日本は小選挙区制と各簿式の混合であるということが分かったが、説明文が難しく結局よく分からなかった。本書評を読んでもよく分からなかったため、講義を聞いて比較政治制度論についてよく学びたいと思った。
小松原（健）	アジェンダ・ルールが多数派優位な議会では、採決ルールにおいても少数派の保護があまりなされない。逆に、アジェンダ・ルールが多数派に有利でない場合には、採決ルールも少数派の拒否権を強く認めるものとなる傾向がある。p.7	各国における、少数派の尊重が具体的に、どのくらい行われているのか、またその具体的な事例があるのか気になった。日本の議会は、確かに多数派のほう尊重されているイメージがある。そして、小選挙区比例代表は、落選したものがブロックによって復活し、多数派が増加する選挙構造になっており、より多数派のほうに権力が強い構造になっているのではないかと考える。実際に、海外ではどのような議会構造、選挙構造しているのか疑問に感じた。
小松原（健）	比較の方法と統計・実験の方法との共通項に新たに着目することにより、政治学の方法はさらなる展開を見せているのである。p.5	政治問題、政策問題を考えるときに、「比較」のみで考えてしまう場合が最近では多いのではないと思う。例えば、「移民問題」などは、他国と簡単に比較され、グローバルな流れを取ることをのみを考えてしまう場合もある。私はそのなかで必要なことは、比較と統計、実験を合わせたものであると思った。
高橋	比較政治研究を実際に複数国間で行う場合には、比較制度やその因果メカニズムを単純・直接応用することはできないという箇所が重要だと思った。(p.3)	その理由は比較政治制度の知見は実際の比較政治研究や制度改革の現場には応用できないものの、全体として推論を進めていく際には有用だからである。当然のことながら複数国間で政治制度を比較しようとしても各国における状況や実態が全く異なるため、複数制度の相互作用をそれぞれの国の条件下で考えることが必要不可欠である。しかし、複数国間で政治制度を比較することは各国において制度改革を模索していく上で、非常に重要な視点となると考える。

(continued)

氏名	Q1	Q2
田辺	「研究」の意義 (3 頁)	「現存の問題に対する処方のような解決が与えられなかったとしても」、何らかの示唆を与えるという部分が重要だと思った。すぐに現実の問題に効果を与える研究じゃなくとも、それらが積み重ねられることで「現実」の問題について示唆を与えることができると考える。また、ここで挙げられている「研究」の意義は政治学だけでなく他の分野でも該当すると考えたから。
為石 (智)	政治学の方法の展開 (4 ページ)	書評のこの部分から、社会的制度論と合理的選択制度論との関係を調査するきっかけとなった。効率性や個人の利得追求の結果ではなく、社会的な背景や歴史・文化に重点を置く社会学的制度論は組織や個人の行動に影響しており、個々の利益の追求から成り立つ合理的選択制度論とは反対の視点であるように感じられる。しかし、両者とも文化や社会の規範と大きく関係しており、政治を比較するうえで考慮していかなければならないということが分かった。
丹後	比較政治学 1～6	制度がどのような効果を生むのかを明らかにし、制度改革への示唆を提供しているからだ。比較政治学の手法を活用しつつ、政策実務にも有益な知見を提供している点で本書の意義は大きいと考える。政治制度の比較研究において因果メカニズムの解明を重視し、新制度論を明確にしたことが重要な点に感じた。フォーマルな制度だけでなく、インフォーマルな要素にも着目し、それらが政治行動に与える影響を論じている点が特徴的である。
西田	「必ず複数の制度の相互作用をそれぞれの国の条件下で考えることを余儀なくされた」 (3 枚目)	このような部分が印象に残った理由は、国ごとに比較政治制度の研究をしていくことの重要性が理解できたからだ。比較政治制度の研究は複雑であるため、単に他国の制度を取り入れることはできないということがわかった。それは、それぞれの国には、政治や社会の様子などの様々な条件や状況があるからである。そのため、他国で成功している制度を取り入れたとしても、同じように成功するとは限らない。だから、比較政治制度の研究では、国ごとが条件に合わせた研究をすることが必要であると考ええる。
野田	政治学の方法が比較から比較と統計の組み合わせに大きく進展したこと。(5 ページ)	政治学の方法に政治学の方法にも様々なものが存在し、日々進展がなされるように多くの面で努力がなされていると思ったから。政治学の方法が進展していくことで今後どのような影響があるのか疑問に思ったし、またそれを追求していくこともおもしろいのではないかと考える。様々なものが存在し、日々進展がなされるように多くの面で努力がなされていると思ったから。政治学の方法が進展していくことで今後どのような影響があるのか疑問に思ったし、またそれを追求していくこともおもしろいのではないかと考える。
原田	p5 比較の方法が政治学の方法であること	そもそも比較の方法がたくさんあることにも驚いたし、政治学の独自の比較の方法があることが面白いと感じる一方で重要なことなのかなと感じたから。また、政治学の方法が「比較」から「比較」と「統計」の組み合わせにまず大きく進展したことと比較の方法と統計・実験の方法との共通項に新たに注目することにより、政治学の方法はさらなる展開を見せているということ、つまりどちらの方法も利用しながら発展させていくことができるというのはとても面白く重要であり、どの分野においても重要なことかなと感じたから。

(continued)

氏名	Q1	Q2
藤井	「日本の選挙制度は個人投票誘因の強い制度から政党投票誘因の強い制度へと変化した」(P.3)	この内容にはとても納得でき、ある個人を支持するから投票するよりも、ある政党を支持するから投票するという手段をとっている人が多いのではないかと感じる。立候補者についてはよくわからないけど、自民党が支援しているから何となく投票するといった人はこのケースに当てはまると考える。自民党内でも、〇〇派など細かく分かれているのにも関わらず、派ごとの違いを知っている人はかなり限られていると考える。ある政党を支持しており、立候補者はその政党に所属しているからと言って自らが期待する政治を行う人なのかは判断できず、所属している政党ではなく、その人自身を見る必要があると考える。
藤田	政治学の方法の展開の 5 行目以降「本書では。。。」の部分	この部分では初学者が新制度論を理解するにあたって、なるべく正確かつ混乱しないようにするために新制度論を 3 つの観点に分類して説明するといった内容が記載されている。しかし、この説明の仕方が現在の政治学の方法をめぐる発展の先端を覆い隠していることも説明されてる。私は政治学に関しては初学者であり、資料に書かれていた通り、正確かつシンプルな記述がしてある方がありがたいと感じる。しかし、政治学というのは本質を理解するためには複雑な考え方に触れなければならず、多様な考え方が存在するということを理解した。そのため、政治学を学ぶことに終わりはなく、学ぶ際も様々な敏屋の考え方を活用しながら学ぶ必要があると感じ重要だと考えた。
本田	因果メカニズムが解明できたとしても、制度の組み合わせや実際の運用により結果は変わってくる p3	文章にもあったように制度の変更によってある国ではうまくいったとしても、他の国が同じ制度を取り入れたからと言って同じようにうまくいくわけではないと知ったから。確かに、国によって抱えている課題は異なるので、それぞれの国に必要な制度も異なってくると感じた。適切な制度を取り入れることができるかによって国の政治が変化していくのだと分かった。
三島	最も代表的なのは、多数決主義型とコンセンサス型の民主主義を対比させ、民主主義の実現の様々な基準から、「二大政党制」神話を崩した点にある。1 ページ	この部分が面白いと感じたのは、民主主義といえば「二大政党制が安定していて優れている」というイメージがなんとなくある中で、それをデータと理論をもとに覆しているからだ。「多数決主義型」と「コンセンサス型」の民主主義を対比させることで、単純な二大政党制の優位性だけでは語れない側面があることを示している点が興味深い。特に、「多党制や連立政権は不安定で意思決定が難しい」という一般的なイメージに対し、それがむしろ少数意見を尊重し、合意形成を促す役割を果たす可能性があるという指摘は新鮮だった。
渡邊	因果的メカニズムの解明について (3~4 ページ)	選挙制度や政党制度などのようなそれぞれの制度がどのような結果を導き出すのかに関して、因果メカニズムが解明できたとしても、制度の組み合わせや実際の運用によって結果が変わってくるという部分が重要であると感じたからである。変化が実際にどのような影響を与えるのかを理解していくためには具体的な因果メカニズムを分析していくことが重要であると感じた。